
俺と神様と日常と

卯月 夕日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と神様と日常と

【Nコード】

N6322Y

【作者名】

卯月 夕日

【あらすじ】

舞台は某都内の比較的田舎に近い某市内での学校生活しかり、日常生活。

主人公、燈陽とうようとお人好しな性格とその日の朝の占いが災いして燈陽に拾われた神様、通称「暇神ひかみ」の日常的かつ非日常を描くストーリー。

主人公、燈陽は父がサラリーマンの中流階級の極普通の健全なる高校1年生。

しかし、とある雨が降る日にたまたま街で見かけた傘を差さない銀髪の青年に声をかけた事で燈陽の人生が180度変わる事となる……。

友情、スクールライフ、恋愛などなど、沢山のテーマを元に記録されていく物語です。

そう言っつて燈陽は自分の勉強機の隣となりにある本棚から適当に漫画を取ると、銀髪の青年に渡した。

「絶対だな？」

「ああ。」

銀髪の青年は確かめると満足そうに漫画を開きながら床に座った。

これでやっと集中して勉強出来る……。

燈陽はシャープペンを握にぎった。

全ての始まりは、約一週間前。

それは、冷たい雨が降る日だった。

く拾い物

その日の雨は久々に降った雨だった。

『今週はずっと晴れだって言ってたのにな……』

燈陽はそう心の中で天気予報に毒つきながら先ほど買ったばかりの漫画が入ったビニール袋を見つめた。

個人的に雨は嫌いだ。

第一に外に出かけるときに洋服が濡れるし、傘を差さなければいけないから荷物が多い時には億劫だ。

……それに、気分的にも沈んでくる。

行き交う人達は傘をぶつかけたり避け合ったりしながら自分の目的地に向かって歩いていく。

しかし、

その中に1人、周りとは違う動きをしている人がいた。

『……傘を差していない……？』

そう。

その長い銀髪の方は傘を差さずに全身ずぶ濡れのまま立ち、灰色に濁る空を見上げていた。

そして隣を歩く人々は皮肉なことにその銀髪の人には見向きもせずに通り過ぎていく。

そこで燈陽は思い出した。

『……、そういえば今朝の占いで人助けをすると良い結果が来るとか言ってたっけ……?』

ということと燈陽は銀髪の人に話しかけることにした。

「あの……、傘持っていないんですしたら家まで送って行きましょ
うか?」

すると銀髪の方はゆっくりと顔を燈陽に向けると、

「お前、生人せいじんだな。……生人のクセに吾わが見えるのか。」

と珍めづしそくに燈陽の顔を覗のぞき込んできた。

燈陽は銀髪の方が何を言っているのか分からなかった。

「いや、普通に見えますけど……何か不都合でもあるんですか……?
」

「……いや特に吾には不都合も何も無いが、生人には不都合では
無いのか?」

そついうと銀髪の方は辺りを見渡した。

燈陽もつられて辺りを見渡すと、行き交う人々がクスクス笑いな
がら燈陽を見ていた。

「?」

すると銀髪の方は燈陽を見て、

「場所を移すか。」

と言って燈陽が差す傘に入らずにスタスタと歩き出した。
燈陽はその後について行くことにした。

「あの、良かったら俺の家に来ますか？俺ん家、この近くなんで。」

燈陽は何となく辺りに人がいないことを確認するとそう言って銀髪の人を案内した。

歩いて5分後、とある一件の家にたどり着いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6322y/>

俺と神様と日常と

2011年11月20日18時55分発行